

### 論文審査の結果の要旨

上記の論文は、量化解釈と疑問解釈という、統語論で頻繁に取り上げられてきた問題に、まったく新しい観点からアプローチした意欲作である。

従来の研究においては、量化解釈というものは、述語論理学の量化子（quantifier）という概念に基づいてとらえられてきた。量化子とは、個体の集合に適用して、指定された条件を満たす個体の量を指定する働きを持った要素である。したがって、この考え方に基づくと、量化解釈を持つ文とは、何らかの集合の量を述べたものだけということになる。これに対して本論文は、量化解釈を持つとされてきた文は、単に量を述べるものではなく、当該の集合の性質に関する陳述文であるととらえなおした。まず、この点が従来の研究と大きく異なる点である。

これまでのアプローチでは、異なるタイプの量化解釈は、それぞれ、関わる量化子のタイプが異なっていると仮定することで説明されてきた。これに対して本論文では、集合そのもののタイプとして、AND 集合（独立的並立関係に基づく集合）・WITH 集合（協力関係に基づく集合）・IOR 集合（包含的選択関係に基づく集合）・EOR 集合（排他的選択関係に基づく集合）の4つの区別が提案され、量化解釈の違いは、これらの集合の組み合わせで説明された。本論文では中国語の様々な表現が取り上げられ、この4つのタイプの集合を仮定することによって、それぞれの解釈の違いが、より体系的に一貫性を持って説明できることが示されている。集合というものに上記の4つのタイプがあるという考え方は、認知的な観点から見ても不自然なものではない。これに対して量化子の場合は、認知的な存在物ではないため、その存在基盤を認知科学に求めることができない。その点でも、本論文の提案する言語理論には、言語を単に無機的な記号の体系としてではなく、人間の脳の中で実際に働くシステムとして追究しようとする王慶氏のアプローチが投影されている。

本論文では、疑問文とは何かという問いも掲げられた。中国語では、疑問を表す文末助詞が複数あるが、その生起条件は、文中にあらわれる名詞のタイプによって、複雑に定められている。本論文では、様々なタイプの疑問構文を精査した上で、大胆な記述的一般化が行なわれ、その結果、EOR 集合の関わり方が疑問構文の違いを導く根源となっていることを明らかにした。少数の仮定の相互作用によって、一見、非常に入り組んだ疑問構文の特徴を説明したのは見事である。

また、本論文では、「誰」「何」などの不定語が、なぜ、全称量化解釈・存在量化解釈・疑問解釈という大きく異なる解釈を持つのか、そして、なぜ、それぞれの解釈が特定の環境でしかあらわれないのか、という問題についても考察された。本論文は、不定語というものの本質を OR 集合を表すものであると考え、それが IOR 集合である場合に存在量化解釈が、EOR 集合である場合に疑問解釈と全称量化解釈が生まれるとしている。ここで、排他的選択関係にもとづく EOR 集合が全称量化解釈をも生みうるという点が極めて興味深い指摘である。英語や日本語においても、「whether one likes it or not」「好きでも嫌いでも」のように、互いに両立しない排他的選択関係を示すことによって「いかなる場合でも」という全称量化解釈を表すという現象がある。本論文の提案は、中国語以外の言語の研究に対しても、大きな刺激になるものであろう。

以上のように、本論文は、中国語構文論にとどまらず、ひろく、集合という概念の関わる文の構造と解釈について、様々な点で新しい提案を含む理論を構築しており、きわめて斬新で広範囲の影響をもちうる研究である。よって、本調査委員会は、本論文の提出者が、博士（文学）の学位を授与されるに十分であることを認める。